

研究ノート・南島神名の示す事物、事象について

照屋 理

はじめに

南島とは奄美地域から八重山地域までを含む範囲を指し、かつて琉球国として一つの文化圏としてあった地域を意味する。南島地域では、古琉球時代以来、あるいはそれ以前からたくさんの神々が祀られ信仰されてきた。『おもろさうし』（1531～1623年成立）や各地域で伝承される呪詞、古歌謡には多くの神が登場しており、その活躍をうかがい知ることができる。『琉球国由来記』（1713年成立）には御嶽とともにそこに祀られる神の名¹や由来譚などが記録されている。

南島の人々はこれらの神々に何を願い、祈ってきたのだろうか。祀られた神々は昔から現在まで変わらず同じ役割・機能を期待されてきたのだろうか。あるいは人々はそれらの神々に対してどのようなイメージを持っていたのだろうか。

本稿では、南島において人々は神々に何を祈り願ってきたのか、祀られてきた神々は本来どのような存在であったのかを、神々の名が指し示す事物、事象を一つの手掛かりとして探してみたい。

1 神名の構成要素

オモロや神歌、呪詞、説話などの資料をもとに南島地域に広がる神名群を見渡すと、カミ（神）という語が付いている神名と付いていない神名があることが分かる。カミ（神）に注目すると、南島全体では「～カン（神）」²、「～カンガナシ（神がなし）」という形が最も多く見られる。また、奄美地域では「～カミサマ（神様）」³、「～カミサマガナシ（神様がなし）」という語形が、八重山地域では「～カンヌマイ（神の前）」⁴、「～カミサマヌマイ（神様の前）」という語形が地域的特徴として見られる。

宮城栄昌は「古代の沖縄では神は神を以て呼ばれなくとも、十分神として観念されていたのではないかと思う。すなわち『さすかさ』や『あけしの』は『さすかさ神』『あけしの神』と呼ばれなくとも神であった」（宮城 1979：p12）として

いる。宮城のいう「古代の沖縄」がいつ頃を指すのかは不明だが、南島歌謡をみると、確かにサスカサガミ、アケシノガミという語彙は見当たらない。サスカサやアケシノは、カミ（神）という語が附随していなくても神的行為をなす存在、あるいは祈願対象（神）として登場している。

カミ（神）という語は附随的な要素であることをここで確認しておきたい。これは南島地域のみならず、日本本土の神名も同様の傾向を持っているとされる²。

それでは神名の付随的でない部分とはどのような要素であろうか。神名を分析して構成する要素を取り出してみると、主要な要素として①名詞的要素、②動詞的要素、③形容詞的要素、④その他・未詳語の、4つに大きく分類できる。これらの分類のうち、④その他・未詳語を除く3つのグループ（名詞的要素、動詞的要素、形容詞的要素をそれぞれ神名の構成要素として持つグループ）から神名を取り上げ、民俗事象や呪詞、神歌等の事例をもとに神名の示す事物、事象について考えていく。

2 名詞的要素を持つ神名

神名に含まれる名詞的要素は、人間が手を加えたもの（人工物）と、人間の手が一切加わっていないもの（自然物）の2種類にさらに細分類できる。人工物と自然物の要素を含む神名についてそれぞれ取り上げる。

1. 名詞（人工物）の事例について

神名の一要素として含まれる人工物には、鈴（スヅ）、笠・傘・煽り（カサ、アフリ）、大衣（ウフギン）、袖（ソデ）、井戸（井、カー）、竈（カマドウ）、三つ物（ミチムン）等がある。

ここでは南島地域に特徴的にみられる神名の要素として鈴を取り上げる。鈴を含む神名にはスヅカネ（鈴金）、スヅナリ（鈴鳴り）が見える。まず、順に用例をみてみよう。

スヅカネはオモロ巻¹³⁻⁴⁵（790）に登場する。本文詞章と訳を以下に引用する（反復句の訳は一段下げてある）。

「一 <u>すづかね</u> や	スヅカネは
かみにしや もぢよる	カミニシヤはきらめき輝く
あゆまちへが みもん	（船を）走らせている様が見事に

きよらや (R)	美しい
又 かしらくろおやおうねは おしうけて	頭黒親御船を 押し浮けて
又 あぢおうねや こがねせひ おしたて	按司御船は 立派な帆柱を押し立て
又 げすおうねや くがのせひ おしたて	下司御船は 立派な帆柱を押し立て
又 あぢおうねや まぬのほうは ひきたて	按司御船は 真布帆を引き立て
又 げすおうねや するきほう ひきたて	下司御船は スルギ草の帆を引き立て」

(外間 2000b : p32)

スツカネは神であるカミニシヤと対語関係にあり、後続の詞章から、船あるいは航海に関わる存在であることが分かる。スツカネが船や航海に関わる神であることがうかがえる。

スツカネというのは、オモロ巻 10-14 (524) に「又 すづのなり しよれば / 又 かねのなり しよれば (鈴の鳴り、金の鳴りがすれば)」という詞章があることから、金属製の鈴の意でスツカネ (鈴金) といっているのであろう。

次にスツナリの用例をみてみたい。スツナリは複数のオモロに登場する。例えばオモロ巻3-4 (91) では

「	(前略)
又 首里もり おやのろ	首里杜親ノ口
なよかさの おやのろ	ナヨカサの親ノ口
きみぎみしよ (R)	君々こそ
又 まかびもり おやのろ	真壁杜親ノ口
みぢゑりきよの おやのろ	ミゼリコの親ノ口
又 にしもりの おやのろ	西杜の親ノ口
すづなりの おやのろ	スツナリの親ノ口
又 たいらもり おやのろ	平良杜親ノ口
みぢゑりきよの おやのろ	ミゼリコの親ノ口

又 みよちよのの	かみきよら	ミヨチヨノの神清ら	
	かみにしやの	そできよら	カミニシヤの袖清ら
Rきみぎみしよ		君々こそ	

(以下略)

」(外間 2000a : p75-76)

とあり、ナヨカサ、ミゼリコなどの神名と共に列挙され、スツナリもまた神名であることがうかがえる。オモロ巻⁵⁻¹⁵(226)では

「一 たけのすづなりや	嶽のスツナリは
かほう そろゑわちゑ	果報を揃え給いて
あがなさいきゆのちまさり	我が父なる後勝りを
てづて(R)	手擦って

又 きみのもち月ぎや	君のモチツキが」(外間 2000a : p163-164)
------------	-------------------------------

と、神であるモチツキと対となって果報を描える役割を担っており、神であることが分かる。

また、オモロ巻¹³⁻⁴⁴(789)に




「一 すづなりが	ふなやれ	スツナリの船遣れ(航海)
やうら	おちへ	穏やかに船を押して
わかきよ	つかい(R)	ワカキヨをお招き
又 かみにしやが	ふなやれ	カミニシヤの船遣れ(航海)
又 しちようぎや	てうみおうね	上質の木材で造ったすばらしい船
又 まきしや	てうみおうね	上質の木材で造ったすばらしい船」

(外間 2000b : p32)

とあり、ここでも同じく神であるカミニシヤと対でうたわれており、神と考えていい。このオモロは全体が短くて詳細は不明であるが、やはりスツナリが船や航海と関わる神であることがうかがえる。

神名スツカネについて、オモロ巻¹⁰⁻¹⁴(524)に「又 すづのなり しよれば / 又 かねのなり しよれば(鈴の鳴り、金の鳴りがすれば)」という詞章があることから鈴金と考えたが、再度この詞章を参考にすると、「すづのなり / かねのなり(鈴の鳴り・金の鳴り)」と鈴が鳴っている事象が明らかに認識され、描かれていることから、スツカネと同じくオモロに登場するスツナリという神名は鈴が鳴るという事象を表わした神名と考えられる。

これは名詞スツ（鈴）+動詞ナル（鳴る）の連用形となっており、神名ヨモチ（ヨ持ち）などと同様に、南島地域に特徴的にみられる神名の構成である。なぜ鈴が神名に含まれる要素となったのであろうか。南島地域における神と鈴はどのような関係性を持っているのであろうか。

南島地域の民俗事象において鈴について思い出されるのは、ジュリンマと称される、春駒に似た行事で出てくる馬の模型についている鈴である。その他には神道や仏教等の影響と見られる事例以外では余り聞かれぬが、奄美地域では、親ノ口が身につける祭具にタマハベルと称されるものがあり、それに鈴（「 スヰズヰ」）と称される）が付いている事例が確認される。タマハベルは祭礼の時にいわゆる勾玉と対をなすもので「玉（勾玉）を胸にかけ、amahak を背にかけた」（長田 1977：p551。カッコ内筆者）とされ、親ノ口の神衣装として非常に重要な祭具であることがうかがえる。おそらくスツカネ、スツナリなどの神名に含まれるスツ（鈴）は、タマハベルの鈴のように、神聖性や霊力といったいわゆる祭具や呪具の持つ意味と関連していると思われる。

ところで鈴の祭具・呪具としての役割について、南島地域で確認できる事例は残念ながら少ないが、日本本土においては古くから広く認められるところである。日本本土では鈴の音色に悪霊などを取り除く機能や、神霊を召喚する機能があるとされており、鈴そのものというより特にその音色に呪的な力があると見られている（朱家駿 2001：pp44-45）。

南島においてもスツナリ（鈴鳴り）という鈴が鳴る現象に注目した神名を考えれば、日本本土のように鈴の音色に一種の呪的な力を認めていたことが考えられ、共通した部分があることがうかがえる。

ただし、南島においては祭祀の場で鈴の類が手に持たれることはなく、また神社のような神を呼び出す鈴もほとんどない³。奄美では鈴を身に着けている事例があるが、日本本土との関係性に言及するならば、なぜ手持ちから背中につけるようになったのか説明が必要であろう。また、悪霊を祓って場を清める、神霊を召喚するという機能は神事の前に行われるのが通例であろうが、奄美のタマハベルは神事・祭祀の間中ずっと首から背中へ掛けられているもので、神役が動く度に鳴ることが予想される。それはつまり、手持ちの鈴であれば手から離して置き、鳴らさないことができるが、身に着けていてはそれはできないのである。

これは、鈴の音色に呪的な力を認めるという日本本土との共通したイメージに対して、日本本土とは異なる南島的な意識の表れであろうことを指摘しておきたい。

2. 名詞（自然物）の事例について

神名の要素として含まれる自然物を表す名詞には、太陽、月、星、山、火、水といった事例がある。奄美から八重山までのそれぞれの地域で最も多くみられるのは太陽を要素として持つ神名であるので、ここでは太陽を意味する名詞を含む神名をひとまず取り上げてみたい。

太陽は南島地域の方言ではティダ、ティダー、ティーダ、フィーなどと称される。オモロや南島の呪詞・古謡では「てだ」、「ひ」のほか、「てるかは」、「てるしの」といった語形でうたわれている。

自然物（天体）としての太陽の事例については、オモロ巻8-50（442）反復句に「うの時のてだの あがて てりよるやに おみかうの みぼしや（午前5時の太陽が上がって照るように御み顔が見たい）」とある。また一方では、巻7-20（364）に「又 なさいきよもい あぢおそい てるかはが あがるやに かけおそて / 又 あがかいなで あんじおそい てるしのが あがるやに てりおそて（父なる按司様はテルカハが上がる様に国を照らし支配して、撫で慈しむ按司様はテルシノが上がる様に照らし支配して）」と、天体・太陽としての「てるかは / てるしの」がみえる。

一方、豊見城の「大旱に響の時の崇」（オタカベ68）⁴をみると、雨乞いの祈願対象として太陽が登場する（下線筆者）。

「数珠の大あすめ	数珠の大あすめ
<u>天の大てだ</u>	天の大太陽
竜宮の神	竜宮の神
あいちなりめしよわちへ	相手になりなさって
雨ふらちへ	雨降らして
御たばいめしよわちへ	御たばりくださって

（以下略）

」（外間ほか 1977 : p106）

他の神と協力し合って雨を降らすよう人々から祈願されている内容となってい

る。また、久米島のオタカベ「大雨乞之時宇根村にて宇根のろ火之神前江たかべ言」(オタカベ3)では「とご系 系りぢよ あはせめしわろ(十声、御声をあわせなさる)」ことが求められている。

「	(前略)
天のみや	天の宮
雨のみやに いまふれば	雨の宮にいらっしゃれば
<u>大てだ</u>	大太陽
<u>世のてだがなしと</u>	世の太陽ガナシと
とご系	十声
系りぢよ あわせめしわろ	御声をあわせなさる

(以下略) 』(外間ほか 1977 : p49)

奄美沖永良部島の呪詞「豚拝み」(オモリ・クチ・タハブエ295)⁵では神として登場した太陽がその意思を明らかにする場面があり、太陽による具体的な言葉が記されている。

「201 ていんじ ていりていだが	天で照る太陽が
202 うめんせんとくるが	おっしゃるところは
203 うら とーら じんきやに	お前、俵、銭金
204 うらどうぬむんし	お前自身のもので
205 ちくとうぬむんでい うみゆんにや	作っているものと思っているのか
206 ていんじ ていりていだから	天で照る太陽から
207 ちくらちゆぬむんどや	作らしているものだよ
208 うら きむわりむんだる	お前肝がわるい者である
209 しょーわりむんだる	性悪ものだ
210 うらおーな へーていくりら	お前のオー名を替えてあげよう
211 みきゆな へーていくりら	お前のミキュ名を替えてしまおう

(以下略) 』(田畑ほか 1979 : p102)

上記の事例をみると、太陽は他の神々と協力し合って人間の願いを聞き届ける存在として認識されていることが分かる。久米島の事例では協力する際には「とご系・系りぢよ(十声、御声)」をあわせることが必要であり、それが可能と考えられていたことが分かる。また、奄美の事例では具体的な太陽の言葉が記され

ていることをみると、具体的な言葉を発して意思の伝達を行うとイメージされていたことがうかがえよう。

日本本土の神名においても太陽と関わる神は認められ、神名ヒルメはヒ（日）ル（の）メ（女・女神）の意とされる。しかし、日本本土の神名ヒルメが太陽を、一種擬人化して表現しているのに対し、南島では太陽そのものを示す「てだ」、「てるかは」、「てるしの」がそのまま神名となっている点に特徴が見られよう。

ところで、オモロ巻¹¹⁻⁷³ (628)には「又 てるかはが うざししよ てらちんのせぢ おろちへ/又 てるしのが うざししよ てらちんのせぢ おろちへ (テルカハのご命令ぞ、東方の靈力を降ろして、テルシノのご命令ぞ、東方の靈力を降ろして)」という詞章がみえる。ここでは「てるかは/てるしの」からの命令があったこと、つまり意思の伝達があったことが読み取れる。上で見た呪詞・古謡の、太陽が意志を明らかにする事例に通じる。

この他、オモロには、上記の地域にはみられない特有の事例がある。オモロ巻¹⁵⁻⁶ (1057) 反復句に「つしやこのいしと かねと やに てだ しひ つかばとのす 世は ちよわれ (磁石と鉄がくつつくようにテダの靈力が付いたなら殿こそ世を支配してましますのだ)」とあり、またオモロ巻¹⁵⁻³⁷ (1088) 反復句に「かみ てだの せぢ (神テダの靈力)」と見えることから分かるように、太陽がセヂ (靈力) を保持しており、また、それを付与できると考えられていることがうかがえる。この点については、日本本土のヒルメ神や天照大神の役割などと比べて南島地域の太陽神の特徴とっておいていいだろう。

3 動詞的要素を持つ神名

神名に含まれる動詞的要素には、連用形の事例と連体形の事例がある。ここではそれぞれの代表的な神名を取り上げる。順番が前後するが、論を進める便宜上、まず連体形の事例を取り上げ、次に連用形の事例について記した。

1. 動詞 (連体形) を含む神名

ここでは、動詞連体形「てる」を含む神名を取り上げてみたい。「てる」のつく神名としては「さしふてるまもの」(ウムイ⁶⁶)、「てるきやち」(ミセセル⁹)、「てるすいてるあかしぬ うむとぅぬかんぬまい」(ニガイフチ¹⁰¹)、「てるないしぬ親神」(その他1 雨乞いの歌^{③21}) などがある。

ここで接頭辞として神名についている「てる」は美称辞として捉えられるが、具体的には何を示しているのか考えてみたい。

動詞「てる」やそれに類する「照り襲う」、「照りあがる」等の動詞は呪詞や神歌のなかで、天体、王、神、その他の事物をそれぞれ主体として用いられている。

順序が変わるが、その他の事物が主体となる事例を先にみておきたい。オモロ巻8-16(408)の「又 つかさや みれば まだま てる みこし」(柄鞘見れば、真玉照る御腰)は、宝刀に飾り付けられた宝飾品が輝くという意味で「てる」とされており、ここではその他の事物を主体として「てる」が用いられている。

天体を主体とする事例は、オモロ巻8-67(459)で「又 よろは 月 てる / ひるは てだ てる」(夜は月が照る / 昼は太陽が照る)という詞章があり、ここでは明らかに天体としての日月が光り輝く意味で「てる」が用いられている。オモロ巻8-26(418)にみえる詞章「てにに てる ほし」(天に照る星)も同様に天体としての星が輝く意味で「てる」とされている事例である。

王が主体となる事例は動詞「てりおそう」(照り襲う・支配する)を用いた事例がオモロに見える。オモロ巻7-20(364)に

「又 なさいきよもい あぢおそい てるかはが あがるやに かけおそて
又 あがかいなで あんじおそい てるしのが あがるやに てりおそて」

(父なる按司様は太陽が上るように支配なさって / 撫で慈しむ按司様は太陽が上るように支配なさって)

とある。ここでは王の支配する様を「照り襲う」という動詞で表している。この表現が太陽の照る事象になぞらえられていることは、「てるかはが あがるやに / てるしのが あがるやに」(太陽が上るように)と、王が太陽になぞらえて歌われているのをみれば明らかであろう。王とは太陽に象徴されるような輝く存在として捉えられ、表現されていたことが分かる。王に対してつく「てる」はそのような支配者としての権威を示す意味を持つことがうかがえる。

さて、神が「てる」事例は天体や王を主体とする事例ほどは多くないが、例えばオモロには巻14-59(1040)に「てるまもん てりよら(R)」(テルマモノ神が照り給うのであろう)という事例がみえる。ここではテルマモノ神は「てる」存在であることが分かる。

キューナ36「御嶽内御願所ニテノコエナ(知念間切)」では、

「 (前略)

- | | | |
|----|-----------|-----------|
| 7 | 大君まへ | 聞得大君神 |
| 8 | さやは御嶽 | 斎場御嶽に |
| 9 | おちやいめせうち | いらっしやいまして |
| 10 | てやかりめしやうち | 照り上がりなさって |

(以下略) 」(外間ほか 1977 : p214)

とあり、聞得大君神が斎場御嶽におもむく場面がえがかれているが、聞得大君神のあらわれることを「照り上がる」という動詞を用いて表現している。

神は、特に太陽に象徴されているわけでもなく、神そのもののあり方として、美しく照り輝く存在であると捉えられていることが読み取れる。神名の要素「てる」はそのような南島地域の人々の神的存在に対する意識が反映された要素と考えられる。

2. 動詞連用形の事例について

ここでは神名「よよせ」を代表的な事例として取り上げる。「よ」(世・代などと表記される)とは南島地域における神名の構成要素として多くみられる。神歌等を見ていくと「よなほさ(世直さ)」、「オモロ」、「よよせきみ(世寄せ君)」、「沖縄地域」、「うぶゆぬし(大世主)」、「宮古地域」、「うぶゆむち(大世持ち)」、「八重山地域」といった神名が確認される。これらの神名から「よ(ゆ)」は直したり、寄せたり、持ったりする対象となっていることが分かる。そもそも「よ」とは何であろうか。

「よ」について方言を見渡すと、奄美・沖縄地域では「世の中」、「御代」と説明されるのに対し(長田ほか 1980、国立国語研究所[編] 1998等参照)、宮古・八重山地域ではそれらに加え、「収穫」、「豊穰」、「豊年」の意味が含まれるとされる(下地一秋 1979、宮城信勇 2003等参照)。「よ」について宮古地域では例えば「ユー ンテル(よが満ちる=豊作)」、八重山地域では「ユー カラサーン(よが辛い=凶作)」などといった言葉があり、いずれも豊穰や豊年といった意味で「よ」が用いられている。

南島全域にみられる「よ」を含む語として「よがほう(よ果報)」があるが、これは各地域共に「豊年」の意を持つとされる。奄美・沖縄地域では「よ」単独では世の中、御代といった意味でのみ捉えられているが、「よがほう」をみると、

奄美・沖縄地域でも「よ」には本来的に豊穡等の意味も含まれていたことがうかがえる。

祭祀行事においては、「ユークイ（よ乞い）」、「ユーニガイ（よ願い）」、「ユービキキ（よ引き）」等、祭祀の名称に「よ」がみられる。乞い、願い、引き寄せる対象となっているユーとは豊穡であるとされる。竹富島の種子取祭での狂言「世曳き」や黒島でのユービキキと称される綱引き行事では、実際に豊穡の象徴である穀物やその種子がムラの人々にもたらされる。

『琉球国由来記』巻20-32には「よ」に関する祭祀についての記述が見える。以下に引用する。

「一 九月、世ノ為崇申事

右祭二八、諸村家々ヨリ御花取り、ツカサ・サバクリニテ其村嶽々へ祭上ゲ、来年世加保アラセタマヘト、祈願申也。百姓中、神酒作り、先祖霊前・家神・竈ノ神ヲ祭り、五穀ノ種子ヲ蒔始メ、祝申也。」（外間守善・波照間永吉 1997：p483）

（九月、世の為オタカベを唱える事／右の祭祀では、諸村の家々から初穂を取って、ツカサとサバクリで各村の御嶽へお供えし、来年の世界果報があるようにと祈願をする。百姓達は神酒を作り、先祖霊前や家の神・火の神を祭り、五穀の種子を蒔いて予祝する。）

これは当時、宮古地域において行われていた祭祀についての記事である。「世ノ為崇申」と「来年世加保アラセタマヘト、祈願」という部分に注目したい。これらは共にこの祭祀の目的が示された箇所であり、「世ノ為」の「世」とはつまり、「世加保（世界報）」を意味することがうかがえる⁶。また祭祀の中で「五穀ノ種子ヲ蒔始メ、祝」として予祝が行われており、「世」または「世加保（世界報）」について、具体的には五穀の豊穡がイメージされていることが分かる。

このような「世」、「世加保（世界報）」と豊穡のイメージの結びつきは、上記した現代における方言の「よ」につながるものである。

ここで改めて神名の構成要素としての「よ」に目を向けてみたい。例えばヨヨセなどという神名は、具体的にどういうことであろうか。

「あかる よゝせきみ」、「おもい 世よせきみ」、「きみの 世ゝせきみ」、「くめの よゝせきみ」、「せだか よゝせきみ」（オモロ）、「よゝせきみがなし」（オタカベ）

等の神々は「よ」を寄せる機能・役割を担うと考えられる。

「よ」を寄せるという事象を考える上で興味深い説話が「久高島由来記」に記されている。久高島の始祖とされる夫婦の話である。一部を以下に引用する。

「或日夫婦相共に伊敷泊と云う所に参詣して、食物豊饒、子孫繁栄を祈願しける折、1ツの白壺に随て浮び来るを、白樽衣をからげて取らんとするに、かの壺波底に沈み隠れて、再び見へず。婦人心つきて屋久留川と云ふ所にまいり、沐浴していさぎよき衣を改め替へ、又かの濱に至り、袖をひろげて白壺をまちければ、白壺みずから浮び来りて、婦人の袂に懸りける。婦人大に喜び、壺を取り、蓋を開けて見るに、麦3種、1小麦、1葉多嘉麦、1大麦、粟3種、1佐久和、1餅、や1和佐、豆1種小豆俗呼有り。

(ある日、夫婦が共に伊敷泊という所へ参詣して、食物の豊饒、子孫の繁栄を祈願していたところ、1個の白壺が波に揺られて浮び来るのを、白樽が衣をからげて取ろうとしたが、その壺は波の底に沈み隠れてしまい、見えなくなってしまった。白樽の夫人は期するところがあって、ヤグルガーという井戸へ行き、沐浴して清めた衣に着替えて、また浜へ戻って、袖をひろげて白壺を待っていると、白壺がみずから浮かび来て、夫人の袂に懸かった。夫人は大喜びで、壺を取り、蓋を開けて見ると、麦3種、1小麦、1葉多嘉麦、1大麦、粟3種、1佐久和、1餅、や1和佐、豆1種、俗に言う小豆が入っていた。)

(小島環禮 1979。訳は筆者による)

ここでは特に「よ」という言葉はでてこないが、「食物豊饒、子孫繁栄を祈願しける折」に、沢山の種子が入った白壺が海から「浮び来」ており、この白壺に入っていた数々の種子を豊穰の象徴「よ」として考えていいだろう。白壺は最初に白樽が取ろうとすると波底に沈んで見えなくなってしまい、取ることができないでいた。そこで夫人が「屋久留川」という井戸（現存）で沐浴し、衣服を着替えて浜へ行き、袖を広げて待っていると「白壺みずから浮び来りて、婦人の袂に懸り」、無事にその白壺を取り上げている。つまり夫人は、海に浮ぶ壺を自らのほうへ引き寄せるという超常的な現象を起こしたわけである⁷。その後、この白壺の種子のおかげで島に五穀が広がり、夫婦（一説には兄妹）は五穀を伝来した神として現在も久高島で祀られている。

神歌等の中では、「よ」を寄せるということについて具体的に示された事例は

4 形容詞語幹を含む神名

神名に含まれる形容詞的要素は、すべて形容詞語幹である。ここでは、形容詞「きよらさ(清らさ・美しさ)」の語幹「きよら」が接尾している神名を取り上げる。「きよら」が接尾する神名は、カミキヨラ(神清ら)、キミキヨラ(君清ら)、クセキヨラ(奇せ清ら)、クニキヨラ(国清ら)、ソデキヨラ(袖清ら)、タケキヨラ等、多数ある。

神名タケキヨラは「たけきよら」、「たきしゅらー」といった語形でオモロや古謡に出てくる。例えばオモロ巻16-23(1149)に

「一 たけきよらの おやのろ	タケキヨラの親ノロ
あがるいに かよて	東方に通って
世のつほに	豊穡の貢物を
おぎやかもいに みおやせ(R)	尚真王に奉れ

又 けさとの おやのろ ケサトノ親ノロ」(外間 2000b : p220)とみえる。このオモロではタケキヨラは「あがるい」へ通うことが描かれている。「あがるい」とは多く「てだがあな(太陽の穴)」と対になる語であり、人間が往還できるような所ではない。また、オモロ巻4-47(198)では「きこへさすかさ」が主体となって「あがるい/てだがあな」へ通う情景が描かれており、「あがるい/てだがあな」への往還が可能なのは、神的存在であることが分かる。同じくタケキヨラも神としてこのオモロに登場しているのである。

タケキヨラの語構成については、タケに形容詞語幹「キヨラ(清ら)」が接尾している構成と考えられる。タケとは背丈などを意味する丈であろう。

神名ではないが、オモロ巻14-12(993)の「よゝきよら 糸けり/たけきよら 糸けり(現世のヨヨ清ら兄弟、タケ清ら兄弟)」という詞章を参考にすると、「たけきよら」の対語として「よゝきよら」が見える。「よゝきよら」の「よゝ」とは首里方言等にみられるユユであろう。ユユとは竹などの節と節の間を意味し、時に人間の脚の節(関節)の間も意味する語である(国立国語研究所[編]1998 : p286)。その対語であるタケも、背丈などを意味するタケ(丈)であることがうかがえる。

神名タケキヨラとは、タケ(背丈)を賛美した表現であり、背丈が高いという意味で、神の体つきについての形容表現が、そのまま神名となっているのである。

日本本土の神名が、例えばイカ（厳）ツ（の）チのように、形容を表わす語＋助詞（の）＋霊力・神となっているのに対し、南島地域の神名は、名詞「丈」＋形容詞語幹「きよら」という構成となっているのは独特で興味深い。

背の高い神の形象が見える文献資料として、『球陽』1777項「本年十二月初六日、久高島加葉江良嶽に神の顕現する有り」も挙げておきたい。久高島の御嶽に神が現われたという記録であり、出現の場面は以下のように記されている。

「(前略) 午刻に至り、該嶽の門口より隔遠すること二十歩許りに、神一位の杖を持ちて顕現する有り。其の容貌を見るに、高さ六・七尺許り、黄金の冠を戴き、黄糸衣を穿ち、赤帯子を束し、青馬鞆（あづま）を穿つ等の模様有り。又、神一位の青衣装を穿ち、大紅冷傘を持ちて従ひ出づる有り。身体は高さ一丈許り、冷傘は長さ二丈許りなり。(下略)」(球陽研究会[編] 1974 : p518-519)

この記事では、まずきらびやかな冠、衣装を身に着けた神が顕れ、後ろからもう一柱の神が冷傘を差し掛けている様子が記されている。最初に顕れた神は「六・七尺」、約2メートルの身長であり、後に従っている神は更に大きく「一丈」、身長約3メートルで、持っている紅色をした冷傘は「二丈」、すなわち6メートルもの長さであり、その光景を間近で見た人々は圧倒されたことだろう。

また、最近の事例として奄美に「ティンツイルボの神」という説話が残されている。

「とう、冬折目ぬ日、しゅっきりゃをらだな、うん畑行じゅたっとう、うるくさ、ティンツイルボ・ツイルボしゅん神様ぬ、何がろ、人ぬ無んぐとうしゅん、音しゅーたっとう、はんむえ取ゆたむん、顔押しゃ上てい見ちゃっとう、にゃー、尾根道ぬ傍だてなんしーあん畑なてい、ティンツイルボしゅん神様んきゃぬ通りしよをむんなてい、『あー、くっりゃ、ちょーしもてい』ち伏していくてい。一人ぬ神様や荒神様なてい、悪戯すいろーちしゅっとう、次ぬ神様が、『がし、人間ば悪戯やすいんな』ち袖し押しゅくいてい行もちゃんち(そのノ口の祭祀である冬折目の日、その畑へ行っていたら、それこそ、天へ届くような背の高い巨大な神様が、何かしら、人間ではないような、音がしていたので、芋を掘っていたのに、顔を上げて見ると、その、尾根道の傍で作っている畑ですから、天に届くような背の高い巨大な神様が通るものですから、『あ、これは、大変なことになった』と地にひれ伏していました。一人の神様は荒神様で

その村人にいたずらしようとする、次の神様が『そんなに、人間にいたずらしてはいけませんよ』と言って袖で押し隠して行ったそうです)。(山下欣一ほか[編]1986: pp220-221)

この説話と『球陽』の記事も合わせて注意したいのは、非常に背の高い、明らかに人間ではないものと遭遇した際、その場に居合わせた人がそれを神と認識していることである。これは背が高い存在に対し、神のイメージを持っているということをやがわせる。タケキヨラという神名からも、背丈の高さについて肯定的な認識が伝わってくる。神に対する一種の荘厳化として背の高さをみることが出来よう。

まとめ

以上、南島地域の神名を分析して構成する要素を取り出し検討してみた。神名は名詞、動詞、形容詞といった語要素が神名の中心的な構成要素となっており、それらの要素が一体となって固有名詞的に神名となっていることが確認された。

南島地域のほかの神名についても同様にみていくと、主要な要素は大きく以下の6つに分類される。

南島 神名の 構成 要素

- ①名詞(自然物)
シノ・テダ・ティンダウ(太陽) ツキ(月) クモ(雲)等
- ②名詞(人工物)
アフリ(爐り) カサ(傘・笠) スヅカネ(鈴金)等
- ③動詞(連用形)
アフリヤイ(爐り合い) スヅナリ(鈴鳴り) ヨヨセ(ヨ寄せ)等
- ④動詞(連体形)
テル(照る) マサル(勝る) トヨム(鳴響む)等
- ⑤形容詞(語幹)
メヅラシ(珍し) ・キヨラ(清ら)等
- ⑥その他(未詳語)
コシラへ、ナヨクラ、マシラベ等

冒頭でも記したが、これらの語要素を神名として持つ神の中には、その名のみが残っているだけのものもある。しかし、その神名に含まれる例えば名詞「たど

「ずづ」、動詞要素「よせ」、「てる」、形容詞語幹「きよら」といった語に、神々の形象や機能等をうかがうことができるというわけである。

南島に広がる神名をそのような視点で見渡すことにより、神の性質や役割あるいは特性、特質などを体系的に明らかにできる可能性がうかがえる。南島地域の人々が、何にすがり、何を祈り願ってきたのか。神名や神名研究は、それらを知るための一助となろう。

註

- 1 『琉球国由来記』に記録されている「神名」には神の名である場合と場所の聖名等である場合があり、『由来記』の「神名」がすべて神の名を示しているわけではない。詳しくは拙稿「南島神名からみたオモロ研究の一側面」(『沖縄文化』104号収載)参照。
- 2 溝口睦子「記紀神話解釈の一つのこころみ(上) 『神』概念を疑う立場から」(『文学』10号1973a 岩波書店)参照。
- 3 照屋の確認したところでは、神社の巫女が持つ手鈴の習俗の南限はトカラ列島である。トカラの手鈴については『十島村誌』に見える。
- 4 『南島歌謡大成』内の歌謡ジャンル名および番号。以下同。
- 5 『南島歌謡大成 V 奄美篇』ではオモリ・クチ・タハブエ292となっているが、同295の誤りである。
- 6 「世ノ為」とは世の中の為という意味ではないだろう。この記事の前後にも祭祀についての記事が並んでいるが、「世ノ為」とあるのは『琉球国由来記』巻20-32の記事のみである。
- 7 これについて波照間永吉氏は「袖の呪性」について指摘し、「五穀の種子は神衣の袖に招かれた」として、夫人を神的な存在に位置づけている(波照間永吉1999 : p989)。
- 8 「『いしけ』は地名で糸満市伊敷が。伊敷集落の下のほうに船の寄る泊があったらしい。」(沖縄古語大辞典編集委員会 [編] 1995 : p63)

【引用・参考文献】

沖縄古語大辞典編集委員会 [編] 1995 『沖縄古語大辞典』角川書店

長田須磨・須山名保子・藤井美佐子 1977 『奄美方言分類辞典』上巻笠間書院

- 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子 1980 『奄美方言分類辞典』下巻笠間書院
- 長田須磨 2004 『奄美随想 わが奄美』海風社
- 菊千代・高橋俊三 2005 『与論方言辞典』武蔵野書院
- 神野志隆光 1999 『古事記と日本書紀』講談社
- 国分直一・恵良宏 1984a 『南島雑話』1巻 平凡社
- 国分直一・恵良宏 1984b 『南島雑話』2巻 平凡社
- 国立国語研究所[編] 1998 『沖縄語辞典』大蔵省印刷局
- 朱家駿 2001 『神霊の音ずれ』思文閣出版
- 鳥越憲三郎 1965 『琉球宗教史の研究』角川書店
- 波照間永吉 1999 『南島祭祀歌謡の研究』砂子屋書房
- 波照間永吉 2002 「沖縄の神々の形象 説話の神と祭祀・芸能の神」『キリスト教文化研究所研究年報』第35号宮城学院女子大学キリスト教文化研究所
- 外間守善・波照間永吉 1997 『定本琉球国由来記』角川書店
- 外間守善校注 2000a 『おもろさうし 上』岩波書店
- 外間守善校注 2000b 『おもろさうし 下』岩波書店
- 溝口睦子 1973a 「記紀神話解釈の一つのころみ(上) 『神』概念を疑う立場から」『文学』10号岩波書店
- 溝口睦子 1973b 「記紀神話解釈の一つのころみ(中の一) 『神』概念を疑う立場から」『文学』12号岩波書店
- 溝口睦子 1974a 「記紀神話解釈の一つのころみ(中の二) 『神』概念を疑う立場から」『文学』2号岩波書店
- 溝口睦子 1974b 「記紀神話解釈の一つのころみ(下) 『神』概念を疑う立場から」『文学』4号岩波書店
- 宮城栄昌 1979 『沖縄のノロの研究』吉川弘文館
- 宮城信勇 2003 『石垣方言辞典』沖縄タイムス社
- 宮城文 1995 [1972] 『八重山生活誌』沖縄タイムス社

